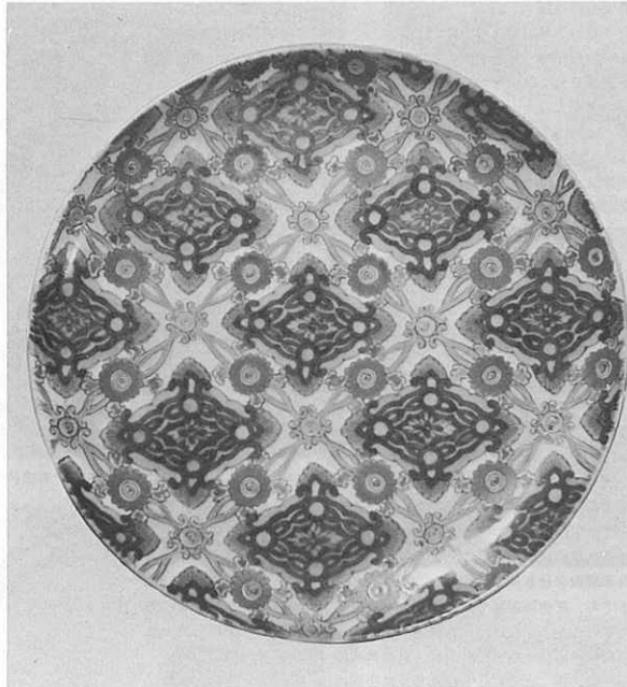


No. 19

## 博物館報



色鍋島更紗文高台皿

鍋島藩窯が、秘境大河内山に移窯した直後の延宝3年（1673）の頃に焼成された色絵磁器で、一般に古鍋島と分類されている。形状はやや浅く、高台の造りは高く、径15センチ内外の平皿である。図案風の更紗文様は、優美で、配色も調和を保ち、気品に富む格調を見せており。裏文様は七宝連鎖文で、高台は劍先文を力強い筆で描いている。

## 目次

色鍋島更紗文高台皿	1
「鍋島藩窯展」	2・3
第13回研究講座	4・5
第14回研究講座	6・7
博物館日誌・行事お知らせ	8

## 鍋島藩窯展

主催 佐賀県立博物館  
会場 佐賀県立博物館  
会期 3月5日～3月24日  
（9時から16時30分まで）  
休館日 毎週月曜日および国民の祝日の翌日  
観覧料 大人 大・高生 中・小生  
個人 50円 30円 20円  
団体 30円 20円 10円  
(団体は20名以上)  
上記の観覧料で常設展「佐賀県の歴史と文化展」も観覧できます。

特別講演会  
日時 昭和49年3月9日(土)午後2時から  
会場 佐賀県立博物館  
演題 色鍋島の様式美とその技法  
講師 佐賀県文化財専門委員 永竹 威氏  
聴講料 無料

### 鍋島藩窯展の特色

このたびの鍋島藩窯展には、東京国立博物館をはじめ、箱根美術館、栗田美術館、岡山美術館、田中丸コレクションなどの特別出品に加え、県内外の愛陶家の方々の理解ある協力出品による百数十点におよぶ名品のほか、東京鍋島家、鹿島鍋島家の伝世の名器や「御注文絵形」などの貴重な資料が展示される。

なお、これまでの、肥前陶磁展では最盛期の「色鍋島」を中心に展示されていたが、今回は、「古鍋島」に時代分類される比較的初期の名品に加えて、元禄・享保時代の格調高い未公開の染付類、青磁類、色鍋島類を技法別に、意匠別に分類展示し、あわせて藩窯後期の大鉢類を展示しているので総合的な鍋島藩窯展であり、藩窯の位置づけと、その全貌が理解出来る内容として構成している。

また、鍋島藩によって運営された藩窯の歴史的裏付けを学ぶにふさわしい「有田皿山代官手頭」「有田皿山代官記」「多久家文書」を展示する。加えて精巧無比な色鍋島の製作工程を学ぶための資料や、藩窯史蹟、大河内山の写真資料等を揭示するので、ただ単に美術品としての鑑賞の機会であるばかりではなく、鍋島藩窯の歴史的背景や、その変遷推移をはじめ、藩窯の秀れた製作技法などを総合的に、身近に学ぶ絶好の機会となるものと思う。

### 主な出品目録

- 古鍋島
- 色鍋島丸文菱形皿
- 〃 墨はじき波に花ちらし文皿
- 染付葦図変形皿
- 〃 更紗文皿
- 〃 青磁梅花文皿
- 〃 鶴文皿
- 色鍋島つばめ文皿
- 染付青磁棕梠文皿
- 色鍋島椿つなぎ文皿
- 藩窯盛期
- 色鍋島唐花つなぎ図皿
- 〃 紅葉漫幕図皿
- 〃 房文皿
- 〃 桜垣桜波濤文皿
- 〃 蒲公英圖皿
- 鍋島青磁耳付花瓶
- 染付青磁雪景山水図皿
- 〃 波頭車文皿
- 銷青磁櫻花漫幕図皿
- 瑠璃手くずや形香炉
- 色鍋島椿つなぎ文皿
- 染付青磁雪の輪文皿
- 色鍋島芥子文皿
- 〃 小手毬文皿
- 〃 牡丹唐草文皿
- 鍋島銷青磁葦図皿
- 色鍋島宝すくし文八角皿
- 色鍋島桃に宝すくし文皿
- 〃 桜垣朝顔文皿
- 〃 岩に牡丹図皿
- 〃 唐花三方割皿
- 〃 桜垣萬文大皿
- 〃 檍圓大鉢
- 〃 花筏圓大鉢
- 〃 弹琴圓台鉢
- 〃 茶つみ圓茶釜
- 染付鷺図大鉢
- 染付青磁唐花丸紋皿
- 〃 水葵文皿
- 色鍋島花籠紋皿
- 〃 青海波葵図皿
- 〃 青海波桜花籠図皿
- 藩窯後期
- 鍋島青磁水香炉
- 染付波に岩竹籠図高台鉢
- 染付脚付向付
- 鍋島青磁草花文脚付向付

○文献資料

御注文御絵形

有田皿山代官江相渡手頭

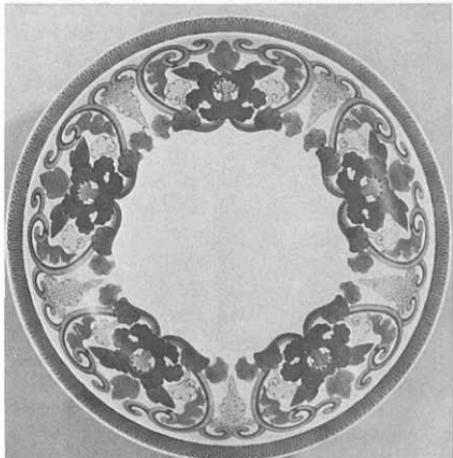
皿山代官旧記観書

赤絵屋制度改革願文書

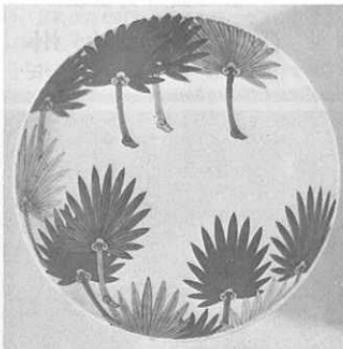
江戸末の御絵形

○関係資料

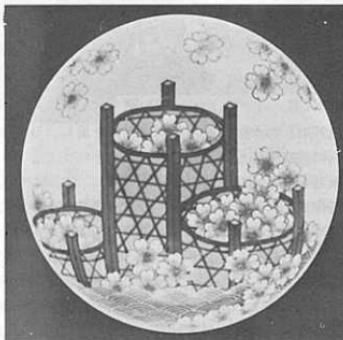
写真パネル



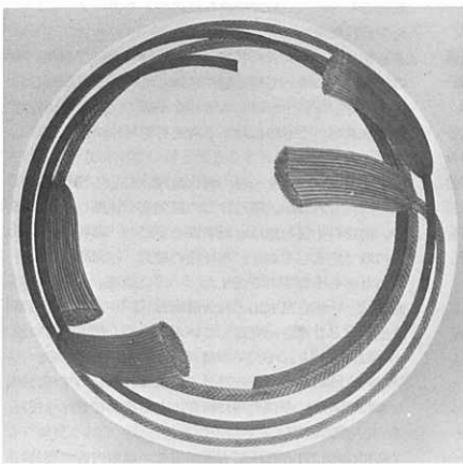
色鍋島牡丹唐草つなぎ文皿 径19.2cm 高 4.1cm



色鍋島棕梠葉文皿 径14.7cm



色鍋島青海波桜花籠図皿 径15cm



色鍋島房紐組合せ文皿 径20cm 高 5.6cm



色鍋島柳につばめ図平皿 径15cm

第13回研究講座  
森鷗外と九州  
作家劉寒吉氏



研究講座風景

鷗外は、わが国に西洋文学の空気を流し、日本文学に本当の意味での近代性をもたらしたということで、矢張り漱石と二本の柱といえる。

石州津和野に生まれた鷗外は、11歳の時亀井家の典医をしていた父に伴い上京、この間、四書五経をはじめ漢籍を非常に勉強しており、このことが後の鷗外文学に大きな影響を持ってくる。13歳で東京医学校予科に入学、本科を終え20歳で卒業、陸軍省務めとなり23歳でドイツ留学、27歳で帰国し翌年結婚、その後長男於誕生後離婚し明治35年まで独身生活を続けている。帰国後近衛師団軍医部長となり、新しい医学書を出し始めるとともに、一方では小説、戯評、小説評論などもやり、文学者としての名声も次第に高くなつた。

しかし、38歳の時、鷗外は突然近衛師団軍医部長から、小倉の12師団の軍医部長として赴任することになる。この時鷗外は陸軍を辞めようかとも考えたが、周囲の説得により赴任を決意し、明治35年3月に第1師団軍医部長を命ぜられるまで、足かけ4年小倉に滞在している。

小倉に着いたのは明治32年6月19日のことで、鷗外は2・3日旧駿前の「異」という旅館に滞在した後、土師町の宇佐美という退役軍人の家に移っている。この家は将校用に新築されたもので、四間の広さの他、馬丁が一緒にいる馬小屋がついていた。

九州時代の鷗外の消息は、しばしば母にあてた手紙と「小倉日記」によりその概要をつかむことができるが、鷗外の「自紀材料」などと違って、「小倉日記」は他人に命じて清書させたものであるから資料的にそのまま信

用しかねる部分もある。例えばこの小倉での独身時代、8人以上の女中を替えているが、これについての「小倉日記」での記述と母宛の書簡では随分内容の異なる場合がある。

独身であった鷗外は、小倉時代、常に2人の女中を置くなど、固く身を守ったが、殊更潔癖を強張する裏には、泰然自若できず、周囲をはばかる風があった。いわば、鷗外には一種の潔癖さもあったが、明治軍人の道德律の中に身を置いていく態度があったのである。

鷗外は小倉の街を背景にして「独身」「2人の友」「鶴」という3つの小説を書いている。いづれも小倉時代の独身である鷗外を反映したものであり、この頃の鷗外をしのばせる。「歴史其儘と歴史離れ」というエッセイにも出てくるよう

に、鷗外が自分らしき人物を主人公として扱う場合には、実にその写実は生き生きとしており、描寫は極めて細密で確実である。

「2人の友」は、今でいう心境小説で、鷗外の小説の中では秀作に数えられるものである。

これは小倉時代の鷗外の若き2人の友の話で、その中で鷗外は2人の青年に独語を教え、1人からは仏教学を教えてもらう、いわば交換教授のことを書いている。この交換教授の他にも、鷗外は独学で「サンスクリット」を、またフランス人の牧師からは仏語を習っており、この小倉時代に極めて精力的に勉強していることが分かる。

「独身」は、いわばシニカルな小説で、鷗外の小倉時代の独身というものに対する考え方を冷やかに見つめたものである。

小倉時代の鷗外を一種の離れて、むしろ沈黙時代だという人もあるが、鷗外はこの期間全く沈黙してはいない。前述の小説の他にも数年間を要した「即興詩人」をこの地で完成しており、後に出てきた「心頭譜」を書き始めたのも小倉である。また、「山口孤庵」「久留米形画家伝」「小倉足立山と和氣清麻呂」「小倉安国寺古墓之記」などたくさん発表している。中でも最も注目に値するのは「我をして九州の富人たらしめば」である。

このように小倉時代の鷗外の行動は、きわめて精力的なものであり、今後の鷗外研究の上で重要な意味を持つくると思われる。

(昭和48年12月8日当館大展示室での講演内容の要約)

(文責 当館)

第13回研究講座  
漱石と現代  
桜光女学院大学長 佐藤泰正氏



研究講座風景

漱石は、その後に続く白樺派や芥川たちを飛び越えて、現代のわれわれに深くかかわっている。彼がいかに切実で重要な存在として現代に生きているかということを少し述べてみたい。

漱石の作品には、初期にしろ晩期にしろ一貫して深く底流するものがあるのだが、ひとつの読み方として、初期の作品「坊ちゃん」を取りあげてみよう。一般にこの作品は痛快無類なものとして愛読されているが、実は最後の部分に注目すると、單にこの作品を痛快無類のものとして片付ける訳にはいかなくなる。ひとつは赤シャツらに天糞を加え東京に帰ってきた坊ちゃんが、ごく平凡な市民生活の中に埋没していくこと、つまり内面的な意味で坊ちゃんを死なせてしまったこと、今ひとつは、いわば下女であるキヨが主人の墓に眠るという異様なイメージ、この2つのことが内的にどのようにかかわっているのかということを考えると、痛快無類な「坊ちゃん」は既に漱石文学の本質にかかわってくることがわかる。

さて、「坊ちゃん」の書かれた同じ年、藤村は「破戒」を、また同じ頃啄木は「雲は天才である」という教師小説を書いている。しかし、「坊ちゃん」には同じく教師を扱ったものでありながら、教師と子供の熱い心の触れ合いが見られないし、特定の子供は1人も個人名でこの教師にかかっていない。つまり漱石がここで言いたいのは、当時の彼の隠した気持ちであり、明治の文明開化に対する批判である。

彼は当時の文明開化を「内発ではなく外発」によるものだとし、物質的繁栄にもかかわらずその中味は空洞化しており、国民はただ互いに神経衰弱にならない程度に内発的に進化して行く他はないと言っている。しかし漱石は、この様な外発的な文明開化に対する批判を被害者の立場からのみ語っているのではない。彼は文明社会の

波をかぶりながら、実はその中心を生きて行く加害者としての痛みも持っていた。

例えば大正3年秋の「私の個人主義」という講演の中で、「坊ちゃん」のモデルにふれて「赤シャツなどはまさに私自身ということになる」と語っており、いわば文明開化の波にのる世界にある赤シャツに漱石は自分の外形を似せているのである。そこに漱石の被害者であり加害者であるという負い目がある。

漱石の現実批判、社会批判を別の側面から見てみよう。彼は晩期に近づくにつれ人間の内面を徹底的にえぐり、「我にとらわれる我執」としてのエゴイズムの追求を深めた。特に修善寺の大患後、彼の人間の内面を見つめる目が段々と深まり、最後の「明暗」に至ると、まさに「百鬼夜行」的に生きしい人物像が描かれる。しかも漱石が深くえぐったのは単に人間の内面だけではない。この現実をも彼の目は深く見ていたのである。

現実批判という点では、彼の処女作の一つである「倫敦塔」は、近代の文明都市のすさまじい様相を的確にとらえており、二十世紀文明の恐しさを洞察している。

修善寺の大患後、病床で書いた無題の漢詩の中に「帰来求命根」とい一節がある。漱石の文学とは、實にこの命根を求めた文学に他ならなかった。そして彼の文学が今日生き続けるのは、彼が人間の命根を求めて起し凝視しただけでなく、我々が生きている近代社会の命根をも凝視し続け、それを徹底的に批判したからである。

(昭和48年12月8日当館大展示室での講演内容の要約)

(文責 当館)

## 第14回研究講座

### 弥生時代から古墳時代へ —その文化と政治的背景—

県教育府文化財調査監 木下之治 氏



研究講座風景

弥生時代に入ると、金属器および水稻耕作技術の伝来とその普及に基づく新しい文化が形成されるに至ったが、繩文時代と弥生時代との文化には、その内容と質とに断層的な相違が認められる。すなわち、自然物を加工利用するにすぎなかった石器文化から金属器を鋳造する文化へ、自然物を対象とした狩獵・漁撈・採集の文化から植物を栽培する文化への展開は、海外からの伝来文化の所産であったにしても、文明の名に値する文化的な段階に達した意義は高く評価されるべきものであろう。

この弥生文化は、先進的な中国文化圏との通交と相まって、当然当時の社会に大きな影響をもたらしたことはいうまでもない。県内の弥生遺跡が山麓から平地にかけて分布し、住居跡からは炭化米の出土がみられる点などから、水稻耕作が広く普及していたことを物語っており、また、彫棺や箱式石棺などの弥生時代墓地の構成や住居跡群からみて、農耕集落が形成されていたことが推定される。墓地内から銅劍・銅鉢あるいは漢式鏡などの金属器が発見されていることは、農耕社会の中に指導者たる、為政者の階級層がすでに発生していたことを暗示せしめている。

県内の弥生時代における文化や社会を、遺跡や遺物の上から考察してみると、大体次のようなことが現状においてはいえるのではなかろうか。

金属器の出土地は、鳥栖市・基山町付近、東有振村・上峰村、三田川町を中心とする一帯、佐賀市北部の大和町・金立町・久保泉町付近、北方町・武雄市付近、唐津湾周辺の五地区に限定されていて、先進的な文化を吸収した首長層の存在する地域を暗示しているとともに、前漢漠・後漢漠・魏志などに、「百余国に分かれる」と伝えられている小国家分立の事実を反映しているとみられる。

墳墓は、彫棺・箱式石棺墓・土壙墓・配石墓・石

築墓、それに大陸の墓制の影響を強く受けた支石墓など、多様化がみられるとともに、一定の墓域に多くの墓が営まれていて、集団墓地を構成しているのが一つの特色である。この集団墓地の背後には、集団的な農耕集落の存在が当然推定されるのではないかろうか。

この集団墓地の中に金属器等が副葬されている為政者の人物の墓と推定されるものが混在しているが、この墓も一般的な集団墓地にあって、他の墳墓との隔絶性が認められないところに、弥生時代における為政者の発生期的な性格を反映しているのではないかろうか。ただ、この集団墓を詳細に検討してみると、集団墓地も家族集団的な幾つかの小グループによって構成されている可能性も考慮されるので、金属器等の副葬された彫棺等についてもその埋葬の在り方について再検討すべき時期に来ているのではないかと考えられる。

彫棺墓は、北九州における弥生時代墳墓を特色づけるものであるが、この彫棺墓の盛行は大形土器製作技法の著しい発達を物語るものであり、また、県内各地から発見されている彫棺の製作技法や形式が類型化されている点が注目される。一定の規格と形式を保つ大形彫棺が一般の人々の余技として製作されたものであるのかどうかということは甚だ疑問であって、彫棺等を製作する専門店な技術集団の発生を暗示しているのではないかとを考えられる。

しかし、彫棺の中には口縁部に刻目を入れた金海式と呼ばれるものや、胴部に陰刻文様を施したものなど、特色のある彫棺が一部の地域から発見されているのが注目される。これらの文様は、住居跡出土の日常容器の縁や壺などには見られない点から遺体を埋納する彫棺にのみ施された埋葬に関係ある特殊の文様ではないかと考えられ、また、これらの文様を有する彫棺の分布が、当時ににおける文化的交流ルートや集落間の親縁関係などを反映しているのではないかとも推定され、興味ある問題を提起しているのではないかろうか。

脊振山麓の有明海周辺における彫棺の分布を見ると、神埼郡以東と佐賀市以西とは、その密度に大きな差が認められる。すなはち、神埼郡以東が密であり、佐賀市以西が疎であって、この彫棺の分布からみると、弥生時代における農耕社会は神埼郡以東に著しく発達していたことが推定される。

神埼郡以東には、脊振山脈から派生して南へのびる舌状丘陵地が著しく発達していて、その舌状丘陵地の間には南へ向かって開けた狭小な低地が介在している。この低地は、泥温地帯を形成しているが、大きな河川は発生していないため洪水等の被害も少なく、農耕具や栽培技術が幼稚であった初期水稻栽培には最も好適な農耕地ではなかったかと考えられ、このような立地のところに最初の水稻栽培が定着したのではないかと推定される。

佐賀平野を貫流する第一の河川である川上川の流域には、

弥生時代の遺跡の分布が余り濃密でないが、これは川上川の水を十分に利用することが可能なまでに土木技術や土木用の工具類が発達していなかったことを物語っているものであろう。川上川の本格的開発は、古墳築成にみられる土木技術の著しい発達と時を同じくしているのではないかと推定される。

三日月町土生の弥生時代中期遺跡の調査の結果、木製の鍤や鋤などの耕耘用具が一応完成の域に達し、わが国における耕耘用具の基本的な原型がこの弥生時代中期に確立していたということが推定される。また、相当に大規模な集落が形成されていたこと、日用容器としては極めて類似化した甕や壺などが主として使用されていたことが明らかになつたのであるが、この甕や壺などの土器には装飾性や個性的な面が影をひそめているのが認められる。このことは、土器製作を專業とする職業集団的なものの存在を暗示せしめており、また一面においては、現実的な生活の実態というものが、日常容器の機能面の重視となって現われているのではないかとを考えられる。

鹿島市の七浦海岸に近く位置している西塙貝塚は、弥生時代中期の遺跡であるが、農耕生活的な遺物は発見されず、この貝塚を築成した人々は漁撈主・狩猟従の生活を営んでいたことが推定される。農耕生活を基盤として展開する弥生社会においても、農耕以外に生活の基盤をおく集落や集團などがあったのではないかと考えられ、魏志倭人伝の対馬國のところに、「良田なく、海物をして自活し、船に乗りて南北に市裡す。」と同じく一大国(壹岐國)のところに、「やや田地あり、田を耕せども猪食するに足らず、また南北に市裡す。」とあるのと同じ生活の実態ではなかつたかと推定される。また、この弥生貝塚から出土している石器は、前時代的な局部打製の特色あるものであって、貝殻などの打碎道具ではないかと推定されるが、農耕集落出土の磨製石器と比較して、その形態や製作技法などに相当の段差が認められるのであるが、これは農耕社会との文化の差を反映しているものであろうか。

弥生時代の甕棺墓は、中期のものがその大半をしめていて、前期及び後期のものはその数が少なく、甕棺墓が弥生時代の中期に盛行したことを物語っている。その甕棺墓の盛行の背景をなす弥生時代中期の社会はどんな社会であったのであろうか。また、弥生時代の後期には甕棺墓に代わって石棺墓が盛行すると考えられているが、中期の甕棺墓に比べてその絶対数は極めて少ないと推定される。弥生時代の前期および後期の墓が少ないという事実は何を物語るものであろうか。

本県の遺跡・遺物の調査の現状において、弥生時代後期及び古墳時代前期のものが極めて少なく、弥生時代から古墳時代への推移を把握することは困難であるが、この時期に大和朝廷が成立し、わが国は新しい統一国家の

時代を迎えることを考えると、この時期の調査と研究がわが国の歴史の謎を解く上から極めて重要な意義を有しているのではないかと考えられる。三日月町土生遺跡は、弥生時代の農耕社会とその文化を知る上から価値の高い遺跡ではあるが、弥生中期の單一遺跡であって、その前後の関連をつかむことが不可能である。

弥生時代後期における甕棺墓の急激な減少と、古墳時代初頭に比定される墳墓がほとんど発見されていない現在、弥生時代墳墓から古墳への変遷過程を明らかにすることはできない。本県における初現的な古墳として、佐賀市金立町銚子探、佐賀市久保泉町熊本山石棺墓・浜玉町谷口古墳などが知られているが、これらの古墳は五世紀前半の築成と推定されていて、弥生後期末の三世紀後半との間に空白の期間が長く介在している。

弥生時代墳墓との基本的な差は、古墳が一定の空間を専有し、共同体構成員などの墓域との隔絶性という点にあるのではないかと考えられる。そこで最近注目をあびてきたのが方形周濠墓ではなかろうか。方形周濠の中には、墳墓と断定できないものもあって、慎重に検討すべき遺跡ではあるが、弥生時代後期から古墳時代前中期にわたるものがその大半をしめている点がます注目される。また、方形周濠墓は、一定の区域を専有して他と隔絶している点において、弥生時代の群集墓との間に一線を画し、古墳の性格に類似点が見出される。しかし、古墳と異なっている点は、方形周濠墓が平面的な隔絶性であるのに対し、古墳が平面のみではなく、土を高く盛りあげて築成されているという立体的な隔絶性をも具備しているところにあるのではないかろうか。

本県内では、中原町姫方・中原町姫方原・鳥栖市本川原・上峰村四本谷の四か所から五例の方形周濠が発見されている。今日の開発工事がブルドーザによる全面剥土の方法をとっているが、この開発方法が継続される限り今後もこの種遺跡の発見が増加していく可能性が予測される。現在発見されている県内の方形周濠は、大体古墳時代の前期ごろに属するものではなかろうかと思われるが、弥生から古墳への変遷の謎を解く鍵の一つがこの方形周濠ではないかと考えられるのである。

墳墓の変遷過程の追求とともに、住居跡あるいは集落そのものの調査も今後に残された課題の一つであって、弥生時代中期に一応安定期を迎えたと推定される社会が、弥生時代後期から古墳時代前期へとどのような過程をたどるのであろうか。墳墓の変遷そして集落や生活実態などの変遷過程を、遺跡・遺物の上から究明し、謎に包まれた弥生時代から古墳時代への過渡期の社会を一步づつ明らかにしていくことが、今後の遺跡調査の課題の一つではなかろうかと考えられる。

(昭和49年1月26日(土)当館中展示室での講演内容の要約)

## 博物館日誌

12月14日	富士町深川道二氏から宮地嘉六の色紙2枚寄贈を受ける。	1月4日	執務始め式
12月15日	東京都近代文学博物館長石田祐彦氏、同博物館企画委員伊川公司氏「日本近代文学展」観覧のため来館	1月10日	常設「佐賀県の歴史と文化展」開場
12月16日	長崎市立附属図書館長鍋島直共氏外20名「日本近代文学展」観覧のため来館	1月15日	常設展「成人の日」のため無料公開
12月18日	富士町深川道二氏から山岡鉄舟の書9枚寄贈を受ける。	1月19日	「郷土の新遺跡資料展」開場
12月19日	「マルケ展」終了（総観覧者数10,089名）作曲家團伊吹信磨氏は来館	1月24日	定期事務監査
12月21日	東京都近代文学博物館副館長高柳宏氏「日本近代文学展」観覧のため来館	1月26日	第14回研究講座（中展示室）演題「弥生時代から古墳時代へ」—その文化と政治的背景—講師 県教育庁文化財調査監 木下之治氏
12月23日	「日本近代文学展」終了（総観覧者数6,153名）	2月1日	2月中NHK佐賀放送局の天気予報背景に当館所蔵の古伊万里、柿右衛門、色鍋島の磁器4点を放映
12月28日	館内消防訓練 執務納め式	2月3日	県北九州事務所長緒方堯氏、北九州市の觀光業者45名を引率し来館
		2月8日	「郷土の新遺跡資料展」終了
		2月13日	長崎県博物館等建設懇話会委員10名来視察
		2月16日	「石本秀雄」展開場

### 行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

常 設 展		1・2・3号展示室	月 曜 休 館
佐賀県の歴史と文化展	49年 4月1日～6月15日 7月10日～9月1日 12月7日～3月31日		

企 画 展			
展覧会名	会期	会場	備考
佐賀県の漁撈と水鳥展	49年5月10日～6月9日	大展示室	常設展と併設・月曜休館
日本陶磁展	6月20日～7月5日	1・2・3号展示室	会期中無休
松本弘二造作展	7月20日～8月4日	大展示室	常設展と併設・月曜休館
東光会展	9月7日～9月16日	1・2・3号展示室	会期中無休
理科作品展	9月15日～9月25日	大・中展示室	"
岡田・久米・百武三人展	9月21日～10月23日	1・2・3号展示室	"
第24回佐賀県美術展	11月2日～11月10日	1・2・3号・大・中展示室	"
松方コレクション展	11月16日～12月1日	1・2・3号・大・中展示室	"
佐賀県高等学校美術展	12月18日～12月22日	大・中展示室	"
新遺跡資料展	50年1月25日～2月23日	大展示室	常設展と併設・月曜休館
肥前名刀展	3月2日～3月23日	大展示室	会期中無休

### 図録「鍋島藩窯」の刊行

鍋島藩窯の図録を刊行します。限定出版になっていまますので希望者には当館にお申込みください。一部600円

#### ——内容——

- (1)鍋島藩窯の史的背景と運営
- (2)鍋島藩窯の様式美とその技法（カラー2枚、モノクロ30点収録）
- (3)鍋島藩窯に関する史料について

その他

博物館報	第 19 号
発行年月日	昭和49年3月1日
編集	古賀秀男
発行	佐賀市城内一丁目15～23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社